



伊勢田 洋次

◆時代は約50年前に遡る1960年代、私は大手筆記具メーカーの平塚工場で働いていた。この工場では主生産品の万年筆を毎月30万本程度生産していた。万年筆は軸にキャップをする式のもので、多くの製造特許を持っていた。特に研究開発には熱心であり、当時、画期的且つ特長的な新製品として「キャップのない構造の万年筆」キャプレスを発表した。目新しいデザインと多くの特許権を擁し、他社に追従を許さないこの商品は確かに脚光を浴びていた。しかし、逆に競合相手がないためか、爆発的に売れるでもなく、独自に進化するでもなく、いつしかマーケットから取り残されていた。

◆時代は流れ1970年代、東京大学の先生坂村健さんが開発した基本ソフト「TRON」が脚光を浴びた。トロンはユビキタス「至る所に存在する」をキーワードにする独自のOSである。冷蔵庫、携帯電話カーナビ、エンジンの制御装置など多方面にわたって利用されている。しかしウィンドウズのように画面で見えないので利用者はトロンに気づかない。しかも利用料は無料である。坂村教授は言う。「情報技術を支えるOSは誰にでも開かれているべきだ」と。

◆さらに現代、トヨタ自動車が、保有する燃料電池車関連の特許を無償で開放し、他企業が自由に使えるようにする事が紙上に紹介されていた。これはハイブリッド車の技術を開放せず抱えこんだ為、世界の自動車市場でのハイブリッド車の比率が伸び悩んでいる現実が決断の背景にあると言う。そしてこれは「技術は抱え込むばかりが能ではない」ことの証明であると記事は締めくくっていた。

◆ことごと左様にどのような場面でも「独り占め思考」で利益を独占する方法と「開放思考」で全体の利便を目指す方法があり、どちらに傾いているかによって行動パターンが決まってくる。自由な発想と適正な競争を阻んでいる不自由な仕組みの拘束から解放された時、人は初めて開放が味わえるに違いない。進歩、改革を伴わない保守的、閉鎖的体質を持つ会社や業界に将来の繁栄は訪れない。思い切って開放路線に舵を切るべきであり、これこそ明るい未来を切り開く唯一の途である。

時代より数千年、狩猟のみで、ある種の動物を二の位をいらした。そんな世界に定住者がいた。そんな動物を、どうやって生きてきたのか、ミステリーだそうである。

「鶴は千年、亀は万年」と言うように、鶴は長命の瑞禽とされる。鳥類の寿命の調査はほとんどされていない。実際のところ、よく分からないトリばかりのようである。「かごの鳥」で長生きしたところで、それがライフ(生命、生活)の質がいいことにはならないだろう。ツルは渡りをする。なかには、チョモランマの頂の上を飛んで、営巣地を変える種がいるときく。もっと低いところはいくらでもあろうに、なにを好きこのんで、最高峰を越えていくのか。きっと、「そこに山があるからだ」とでも言い返してくるのだろう。あるいは、「毎年、この上を飛ぶと、元気がでるんだよね」

さすがに、千年とは生きないだろうが、数十年生きるとすれば、より快適な環境をもとめて、移動=渡りをするのは、理解がいく。

ところが、四か月程度の命の蝶が渡りをするのだそう。それも、つい最近1981年に分かった。日本にいるアサギマダラ。海と国境を越え、移動していく蝶は、いまのところ、世界でこの一種しか知られていない。その距離、2000km超。60日ほどで渡っていく。たとえば福島のコデ平から、奄美の喜界島まで。その上、外と見もよい、浅葱色の地模様がシック。たつぷり、全長10cm



にもなる美丈夫。「てふてふ」と舞うしかない、握ればクシャとつぶれてしまう羽で、この大旅行をする。尋常な行動とは思われない。摩訶不思議だ。不思議には、魅かれていく人が出る。栗田昌裕さんらが惚れ込んで研究している(『謎の蝶アサギマダラはなぜ未来が読めるのか』PHP)。☐

ムシの幼虫、チョウなら青虫は、好き嫌いがはげしい。ほかの種と、えさのとりあいにならないようにしていると捉えれば、生き残っていくために棲み分けしている共存主義でやってきている。殺し合いをしないのだから、平和主義者(?)だ。庭に蝶を呼び寄せたいなら、まずは、柑橘類を

植える。びみょうな好みがあるのだが、レモンの木一本、アゲハが遊ぶお庭ができる。楠の大木には、アオスジアゲハが舞う。クスノキが食草。モンシロチョウは、西アジア原産だが、人類の、キャベツなどのアブラナ科の栽培の拡大とともに、身近な蝶になった。アサギマダラは、なにを喰うかといえば、捕食者の鳥類がきらう毒草を青虫が食べる。毒とはある種のアルカロイドで、ひとさま好まぬので、畑はない。卵はてんでに、まばらに産みつけられる。

成虫になってからも、かなり面倒な生き方をする。蜜を選ばずに吸っていけばよさそうなものだが、きわめつけ、なのだ。昆虫は、交尾のために、フェロモンという類の微量物質をつくらしたりする。オスがメスを引き寄せるための、特殊な香水のたぐい。メスが近くにいるオスに気づかなければ、むやみにふわふわするだけで、子孫がのこせない。いのちがけ。なのに、アサギマダラは、体内でフェロモンをつくらないそうである。どうするか。蜜のなかにフェロモン物質がある花を、せつせつか、あさる。いっちょ前になるために、特別な花のあるところ、あちこちから集まってくる。

そうした男衆の寄せ場のひとつが、コデ平。四、五日の間に、万と群がるそうである。福島で羽にマーキングされた蝶が、後日、奄美で見つかる。一頭だけでなく、数頭捕獲される。単年でなく、毎年見つかる。兵庫や和歌山で捕まる。中継点らしい。なぜに、渡るのか。

いろいろ仮説はたてられているようだが、それらしい理由は見つかっていない。鶴の集団とは違い、どの個体も初経験なのに、どうして大旅行ができるのか。謎。

栗田さんは、本の前書きで「一見小さな生き物がこの地球上で長い旅をしながら、想定外の無数の出来事を切り抜けて生き延びていくためには、人間の通常の『理解の範囲(すなわち、常識)』をどのように超える必要があるか」と言う。

平易な文章。一読、感じ、考えることを促す良書と思う。お手にとられたい。

♡ 自動車保険は、ロード・サービス等を拡充。 使い勝手が良いと、好評です。♡

謹啓、平素は格別のご高配を賜り、ありがとうございます。本年も、自動車保険のご契約者みなさまの一年間の無事故を御祈りいたします。祈念の気持ちを込めて、素品を用意いたしております。ご契約の継続手続きの際にお届けいたします。小社からの花一輪をお受けといただければ、幸いです。店主 敬白

マユさん、お宅でのサロン・コンサートに毎回招待してくださり、感謝。春の陽ざし、一塵の薫風と諧和する名匠フェイギンのチェロ。